

パトリック・モディアノの諸作品に見るカフェの表象

山内 瑛生

はじめに

2014年にノーベル文学賞を受賞したフランスの作家、パトリック・モディアノ（1945～）は、約50年にわたって創作を続けてきた。その作品は、「記憶の芸術」と称され、特にナチス占領下のパリや1960年代など、歴史的過去を舞台とした作品を多数発表している¹。モディアノは、記憶を探求するという同一のテーマを繰り返し扱っており、その手法は探偵小説や歴史小説を髣髴させるものも多い。彼の作品を特徴づけるキーワードは曖昧性やアンビヴァレンスであり、最後まで結論を明示しないまま終わってしまう語り口は多くの小説に共通する要素である²。

このようなモディアノの作品と深くかかわる空間に、カフェがある。『失われた時のカフェで Dans le café de la jeunesse perdue』を筆頭に、モディアノはカフェを小説の舞台として度々登場させてきたが、実は彼の作品の本質はカフェという空間の性質と緊密に結びついているのである。本稿では、パトリック・モディアノの諸作品において、カフェがどのようなトポスを持ち、彼の作品風土にどのように関わっているかについて論じる。

第一章 フランス・カフェ小史

モディアノの作品を分析する前に、まずフランス、特にパリでカフェが一般にどのような空間として位置づけられてきたか、その歴史について述べねばならない。

カフェがフランスにおいて一般化するのには18世紀であり、その数は20世紀初頭にかけて増え続ける³。カフェでの政治議論がフランス革命に大きな影響を及ぼしたことは有名だが、その中心となったのはパレ・ロワイヤルのカフェであった⁴。その後、王政復古期末期から七月王政期になると、グラン・ブールヴァールへとカフェの中心地は移動し、大通り沿いにカフェが立ち並びはじめる。これらは第二帝政期のパリの再開発の中で、ブルジョワ生活を象徴する空間となっていく。一方で、労働者が酒を飲んだり、娼婦が客を張りこんだりするカフェも多く存在した。19世紀後半になると、労働者のアルコール中毒やカフェでの売春が問題視され、規制の対象となる。だが、カフェはむしろその数を増やし、当局は結果的に目をつぶらざるを得なくなった。また、同時期に、文学者や芸術家の議論する場として、カフェが脚光を浴び始める。セーヌ川右岸のモンマルトルのカフェは、ボヘミアン芸術家たちの集合場所として注目された⁵。しかし、モンマルトルが観光

地化すると、彼らは会合の場を左岸のモンパルナスへと移す。1910年代以降、ヘミングウェイなどの外国人芸術家やブルトンを中心としたシュールレアリストがモンパルナスのカフェに通った。「狂騒の時代 (les années folles)」と呼ばれた1920年代には、カフェでジャズが演奏され、外国人も大勢集まった。だが、世界恐慌が起こるとモンパルナスはその活気を失う。一方、同時期にすでに文学カフェとして名高かったサン・ジェルマン・デ・プレのカフェ・ド・フロール (Café de Flore) やドゥー・マゴ (Les Deux Magots) は、戦後までそのイメージを継続させる。第二次世界大戦の際、パリはナチス・ドイツに占領されるが、サルトルとボーヴォワールはカフェ・ド・フロールで執筆活動を続けた。この二つのカフェは、彼らが頻繁に足を運んだことから、戦後に実存主義の聖地となる。だが、1960年代以降は徐々に活気を失い、カフェ文化自体も衰退していった⁶。

以上のようなパリにおけるカフェの一般的な歴史を踏まえた上で、注意すべきは、カフェのイメージが常に画一的なものではなかったこと、そしてカフェへ通う人々の目的が必ずしも一つに限定されなかったことだ。19世紀以降、パリでは芸術家や文学者、ブルジョワ、労働者、娼婦、そして政治運動家などあらゆる階層の人々がカフェへと足を運び、集まる人々によって店ごとに異なったイメージが付与され、カフェは多様性を持つにいたった。モンマルトルのカフェが隆盛して以降、文学・芸術カフェがパリのカフェ文化の中心的イメージを形成したとは言え、決してそれ以外の人間がカフェから離れたわけではない。つまり、カフェは一義的に定められない曖昧性を帯びた場なのだ。

カフェに集う人々の目的についてもそれは同様である。芸術家や文学者の多くがカフェで集まって話すことを主目的としていたことから分かるように、フランスのカフェでは会話が重視されていた⁷。しかし、カフェでは、特に何もせずコーヒー一杯だけ長時間居座ることも可能だった⁸。とりわけ、テラス席は群衆の行き交う姿を見ることで、「居ながらにして遊歩しているような感覚を味わえる」場だったため、一人でテラスに腰かけるのもカフェの利用方法の一つだったのである⁹。また、先述の通り、カフェは文筆家が執筆を行う場でもあった。つまり、会話する場でありながら、一人で時間をつぶす、あるいは作業をする場でもあるというアンビヴァレンスをカフェは孕んでいたのである。他にも、19世紀のブルジョワが、自尊心を満足させるためにブルヴァールの豪華なカフェに集まったり、労働者がアルコールを飲むためにカフェに行ったりと、その目的は様々であった¹⁰。このように、カフェは一貫して、多様な階層の人々が自らの目的に合わせて利用する多義的な空間であり、歴史的に曖昧でアンビヴァレントな場なのである。この点は、次章以降でモディアノの諸作品におけるカフェの役割を考える際にも、注意しておきたい。

第二章 モディアノ文学とカフェ①—記憶の交差点

「はじめに」でも述べたように、モディアノは作品の中で繰り返しカフェを舞台に選んできた。それらは、主に彼の小説に共通する記憶のテーマと密接にかかわっている。しか

し、そこに見られるカフェのイメージは多様である。それは、同一作品の内部についても言い得る。モディアノの小説の語り手は作中でカフェに何度も足を運ぶ（同じカフェの場合もあれば、全く異なるカフェの場合もある）が、それぞれのカフェは必ずしも作中で同様のイメージや役割を与えられているわけではない。本章では、モディアノの諸作品に現れているこのような多様なカフェの表象について、特にそれが記憶とどのように結びついているのかに着目しながら考察する。

カフェのトポスを分析する際、まず目に付くのは、人と人との出会いの場所として、カフェが選ばれていることだ¹¹。『サーカスが通る Un cirque passe』では、語り手が18歳のときに知り合った女性・ジゼルと過ごした日々を回想する。冒頭部において、語り手は警察署で尋問を受けるが、自分の直後に取り調べを受けた彼女に関心を抱き、近くのカフェで彼女の聴取が終わるのを待つ。そして、警察署から出て来たジゼルに話しかける。カフェは、二人が初めて言葉を交わす場になっているわけだ。『八月の日曜日 Dimanches d'août』でも、冒頭で、語り手が昔の恋人シルヴィアの夫ヴィルケールと再会し、カフェに入って会話を交わす。また、物語の中盤では、ニールという男とニースの大通りのカフェ・テラスで語り手が出会う。『青春時代 Une jeunesse』で、怪しげな事業に手を染めている男ブロシエと20歳の青年ルイが出会うのもカフェだ。バーやレストランが登場人物同士の出会う空間になる場合もあるが、カフェでの出会いに比べるとその事例は少ない¹²。カフェは人と人との出会いの場所として意識的に選択されているのだろう。

しかし、一方で、全く正反対の意味を持つ空間、つまり人と人の別れの場所としてカフェが設定されるケースもある。『暗いブティック通り Rue des Boutiques Obscures』では冒頭で、私立探偵事務所の男ユットと彼のもとで働いていた語り手が、二人でカフェへ向かう。ユットはその直後にニースへと去るため、カフェは語り手と彼の別れの場になっている。『サーカスが通る』では、前述の通り語り手とジゼルの出会う場所がカフェだが、最後に二人が会い、永遠の別れを引き起こす場もまたカフェだ。語り手はジゼルとローマに行こうとするが、旅立つ直前の朝、カフェで朝食を食べた後、一度家に引き返した彼女は事故にあって亡くなってしまふ。二人は、朝と同じカフェで昼過ぎに再び待ち合わせる約束をしており、語り手とジゼルの別れはカフェの存在を無視して考えることはできない。『ひどい春 Chien de Printemps』では、写真家のヤンセンがメキシコへと旅立つが、その前日に彼は語り手とともにカフェに立ち寄る。そこはヤンセンが、亡くなった友人ロベールと昔通い、またコレット（おそらくヤンセンの以前の恋人だが明示はされていない）と出会った思い出のカフェであった。それ以来、語り手はヤンセンと会っていないため、このカフェはコレットとヤンセンの出会いのみならず、ヤンセンと語り手の別れの場にもなっていると言える。このように、出会いと別れという相対立する要素を持つ場として、カフェは機能している。こうしたアンビヴァレンスは、モディアノの作品の根幹たる記憶と強く結びついている。「はじめに」で述べたように、彼の小説では常に記憶は探求する対象であるにもかかわらず、決して完全にはつかむことのできないというアンビヴァレンスを孕んだ

ものになっているが、カフェもまた同様の機能を作中で果たしているわけだ。

カフェのアンビヴァレンスは、単に人と人との出会いと別れにとどまらない。それは、記憶の問題そのものとも深くかかわっている。『失われた時のカフェで』では、ル・コンデというカフェが主な舞台となっているが、常連客のボーイングは、ル・コンデに通う客の名前やル・コンデに来た正確な日時などを徹底的にノートに書きつけていく。彼はこの試みを「定点 les points fixes」を定める行為だとし、パリ中のカフェの記録をとることを夢みている。だが、なぜボーイングはそれにそこまでこだわるのだろうか。

Dans ce flot ininterrompu de femmes, d'hommes, d'enfants, de chiens, qui passent et qui finissent par se perdre au long des rues, on aimerait retenir un visage, de temps en temps. Oui, selon Bowling, il fallait au milieu du maelström des grandes villes trouver quelques points fixes.

この絶え間なく行き交い、すっかり通りに紛れてしまう、女、男、子供、犬の波の中で、時々はその姿を記憶にとどめておきたくなる。そうだ、ボーイングによれば、大都市の渦の真ん中ではいくつかの定点を見つけねばならないんだ。¹³

「定点」を定めるとは、大都市を行き交う膨大な匿名の人々の狭間で、それぞれの人間の存在を刻み付けることだ。存在の記憶を消さずにとどめたいという欲望は、ボーイングに限らず、モディアノの小説の登場人物にしばしば見られるが、ここではカフェが人間の記憶を残していくのに適した空間と意識されているのである。

カフェは他の作品でも記憶と本質的なかわりを持つ。『暗いブティック通り』では、語り手が自らの失われた記憶を探求していく過程で、カフェが重要な役割を担う¹⁴。物語の中盤で、語り手は、フラマン人が多く集まるカフェに向かう。彼は、店主から、その建物の三階に、かつてのガールフレンド、ドゥニーズが小さい頃に住んでいたことなど、彼女に関する情報を入手する。注目すべきは、カフェを去った後、はじめてくっきりとした形で、記憶が蘇ってくることだ。語り手は、ドゥニーズと初めて会ったときの状況を思い出す。このとき取り戻された記憶は断片的なものだが、それ以降、そうした断片が蓄積され、少しずつ過去の出来事が蘇っていく。『暗いブティック通り』において、カフェは、このように記憶を明らかにするうえで一つの転換点を示す空間になっているのである。『小さな宝石 La Petite Bijou』では、ある日メトロの駅で目に付いた黄色いコートの女性が、死んだはずの母親に驚くほど似ており、語り手の女性は衝撃を受ける¹⁵。本当にその人物が自分の母親なのかを確かめるため、語り手は彼女の後をつけ、続いてカフェに入っていく。そして、女性を観察しながら次のように感じる。

Il faudrait vérifier si elle venait ici, chaque soir, à la même heure. Je me suis promis de retenir le nom du café. Calciat, 96, avenue de Paris. Le nom était inscrit sur la vitre de la porte, en arc de cercle et en caractères blancs. Dans le métro, sur le chemin du retour, je me répétais le nom

et l'adresse pour l'écrire dès que je le pourrais.

彼女が毎晩、同じ時間にここに来るのか確かめなくちゃ。私は、そのカフェの名前を覚えておこうと決めた。カルシア、パリ通り、96番地。名前は、白の文字で円弧状に、扉のガラスの上に刻まれていた。帰り道のメトロの中で、私は書こうと思ったらすぐにできるように、名前と住所を何度も繰り返した。¹⁶

後に彼女はこの店の常連ではないことが判明するが、母親（と思われる人物）の足跡を追って行く過程で、カフェがその実像を手繰り寄せるための空間になっている。このように、モディアノの作品では、カフェは記憶の実像をつかむための場所として機能しているのである¹⁷。

カフェは自発的な記憶の探求にだけ関わるのではない。カフェでの偶然の出来事が、思わぬかたちで記憶を導く場合もある。『新婚旅行 Voyage de nocces』では、ある日、語り手がカフェに腰かけていると、隣の席に座っていた若い男女が彼に微笑みかけてくる。二人の姿から、語り手は戦前に知り合ったカップル、イングリッドとトリゴとの出会いを思い出す。この小説では時間軸が何度もずらされるが、この場面の直後から、再びイングリッドとトリゴの物語に時間が遡行することを踏まえると、カフェは偶然の作用によって記憶を蘇らせる空間になっていると言える。『青春時代』で登場するカフェ・レーヴ (Rêve) も同様だ。若いカップル(のちに夫婦になる)ルイとオディールは、このカフェのテラスで、たまたま隣の席に座っていたバウアーという男に話しかけられる。彼は、二人が以前住んでいたアパルトマンに現在住んでおり、ルイとオディールは彼の部屋に上がらせてもらう。そこで、偶然プロシエとベジャルディー (プロシエ同様怪しげな商売に携わる男) の昔の写真を見つける。この小説でも偶然により記憶が手繰り寄せられるが、そのきっかけを提供するのがカフェなのである。

しかし、このように記憶を刻み付ける空間、あるいは記憶を手繰り寄せる空間として機能している一方で、カフェは逆に過去の記憶を消していく、記憶から消え去っていく空間にもなっている。『失われた時のカフェで』では、先述のボーイングの試みは不完全に終わる。というのも、最初の語り手の鉱業学校の生徒は、常連客の一人・ザッカリアスの誕生日に、ルキガル・コンデに来ていたことを覚えているが、にもかかわらず、ボーイングのノートにはその日の欄にルキの名前が書かれていないことに気付く¹⁸。記憶は、実に曖昧なものであり、留めておこうとしても、逃れ去ってしまう。カフェはそのことを登場人物に強く意識させる場にもなっているのである。また、物語の後半部では、ル・コンデ自体がなくなってしまう。最後の語り手ロランは、以前ル・コンデがあった場所の前に来てその痕跡を探すが、もう何も残っていない。そこで彼は次のように感じる。

Pendant quelques instants, j'ai cru que je faisais un mauvais rêve.

ちょっとの間、僕は悪い夢でも見ているんじゃないかと思った。¹⁹

かつての恋人、ルキとの思い出の場所はもう消えてしまった。その事實は、ロランに激しい虚無感を引き起こす。結末でルキの死が明らかになるが、他者とのつながりの場として意識されたカフェが、それ自体消失してしまい、強い苦しみがここで表現されているのだ。

カフェの消失が引き起こす苦しきは、他の作品にもしばしば見られる。『新婚旅行』では、結末部で、イングリッドが父と滞在していたホテルとその一階にあるカフェが登場する。語り手は、昔イングリッドから聞いた話を頼りにその場所へ行くが、ホテルもカフェもなくなっている。そこで語り手は次のように思う。

Un soir, elle était retournée elle aussi dans ce quartier et, pour la première fois, elle avait éprouvé un sentiment de vide.

Peu importent les circonstances et le décor. Ce sentiment de vide et de remords vous submerge, un jour. Puis, comme une marée il se retire et disparaît. Mais il finit par revenir en force et elle ne pouvait pas s'en débarrasser. Moi non plus.

ある夕方、彼女 [=イングリッド] もまた、この地区に戻ってきて、初めて虚無感を抱いたんだろう。

状況や背景とほとんど関係なく、ある日、この虚無感と後悔とは立ち昇ってくるものだ。それから潮のように、その感情は引いていき、消える。でも、結局それは勢いよく戻ってきて、彼女は解放されることはなかったんだろう。私だってそうだ。²⁰

存在していたものがなくなってしまうという変化は、語り手に虚無感をもたらす。彼がこの地区を訪れた際、すでにイングリッドは自殺し、この世にいない。語り手は、イングリッドが死を決意するに至った激しい虚無感を想像しながら、二重の虚無感に苛まれている。そのような感情は突如として訪れるもので、人間は決して完全に解放されることはない。カフェの消失は、このように強い虚無感・苦しみを登場人物に抱かせるのである。

『ヴィラ・トリスト Villa Triste』にも類似した場面が登場する。この小説では、語り手が、12年ぶりにスイスとの国境の街を訪れ、当時そこでイヴォンヌという女性と過ごした出来事を回想するが、彼女と別れる際に入ったカフェはもうなくなっている。この小説で注目すべきなのは、彼がそのカフェの名前を思い出せないところだ²¹。カフェは、ここではイヴォンヌとの別れというつらい記憶と結びついているのだが、その記憶さえも薄らいでしまったことが露わになるのである。記憶の場の消失と同時に、カフェは大切な人との記憶ですら少しずつ消えていくものだと語り手に気づかせる空間になっている²²。

『廢墟に咲く花 Fleurs de ruine』では、最後、語り手がウィーンに旅立つ直前の出来事（おそらく1960年代中頃）を回想する。その中で、飼い犬と大通りのカフェ・テラスに座り、外を眺めていた記憶が蘇ってくる。語り手は、その時に見た景色を思い出すことで、当時はパリの環状通りがまだ完成していなかったと気づき、時の流れを身に染みて感じる。こ

ここでは、環状通りは閉じた円として否定的に捉えられ、今やもう逃げ場がなくなってしまったという感覚を語り手は抱く。この小説では、カフェ自体がなくなるわけではないが、テラスに腰かける行為が、時の流れの残酷さを実感させる要因になっているのである。

このように、カフェは、空間それ自体が消失する、あるいは腰かけることで時の流れを深く感じさせるという経験を通じて、苦しみや虚無感を登場人物にもたらすのである。

記憶を消す空間、記憶から消える空間としてのカフェは、また登場人物の人生をリセットし、再スタートを切らせてくれる空間にもなっている。『青春時代』では冒頭部で、35歳の誕生日を迎えるオディールが子供とカフェに行くが、そこで次のように感じる。

Est-ce qu'il peut vous arriver quelque chose de neuf à trente-cinq ans ?[...] Est-ce que parfois la vie recommence à zéro à trent-cinq ans? Grave question qui la fait sourire.

35歳で何か新しいことが起こるなんてあり得るのかな？[...]35歳で人生がゼロから再スタートってするかな？笑ってしまうくらい重い問いね。²³

オディールとルイの20歳の時の出来事が大半を占めるこの小説において、15年後の現在から過去を全て消し去り、再び人生を始めることができるだろうかとおディールは自問する。そうした考えを抱かせる場としてカフェは選ばれているのだ。類似した描写は『失われた時のカフェで』にも存在する。親元からの家出を繰り返しているルキはそれまでの過去を断ち切り、新たに人生をスタートさせたいと願う。『青春時代』のおディールと異なるのは、自発的にカフェに足を運ぼうとするところだ。

J'avais la vie devant moi. Comment avais-je pu me recroqueviller en rasant les murs ? Et de quoi avais-je peur ? J'allais faire des rencontres. Il suffisait d'entrer dans n'importe quel café.

私の前には人生が開けているんだ。どうして壁際で身を隠しながら縮こまっていたんだらう。そして、何を私は怖がっていたんだらう。知り合いをつくろう。なんでもいいからとりあえずカフェにでも入れればいいでしょ。²⁴

ルキは、その後ジャネットという女性と薬局で出会い、彼女を通してカフェ通いを始める。ル・コンデの常連になるのは、ジャネットと通っていたカフェを離れた後だが、いずれにしてもルキにとってカフェは人生の再スタートの場所として意識されているのである。

だが、なぜカフェがリスタートの空間になり得るのだろうか。そのヒントになるのが、ノンフィクション小説『ドラ・ブリュデール Dora Bruder』の次の記述である。

Annette Zelman. Jean Jausion. En 1942, on les voyait souvent au café de Flore, tous les deux.

Ils s'étaient réfugiés un certain temps en zone libre.

アネット・ツェルマン。ジャン・ジョージョン。1942年に、彼らはよく二人でいるところを、カフェ・ド・フロールで目撃されていた。彼らは、しばらく自由地帯へと逃げていたんだらう。²⁵

1941年に行方不明になったドラ・ブリュデーというユダヤ人女性の足跡をたどるこの物語で、語り手は、他のユダヤ人の情報にもしばしば触れる。アネット・ツェルマンとジャン・ジョージョンの名前もその文脈の中で登場するが、彼らがカフェに通ったことを、語り手は上記のように解釈している。「自由地帯 zone libre」という言葉からうかがえるように、ここでは、カフェはナチス占領下のパリにおいて、自由のある程度許される逃避空間として捉えられている。このことは、単にナチス占領下だけの問題にとどまらない。つまり、カフェは、様々なしがらみから解放してくれる空間というイメージが与えられているのだ。このイメージは『迷子たちの街 Quartier perdu』によく表れている。

Mais j'ai voulu qu'un moment encore ma vie reste en suspens à la terrasse de ce café, dans le brouhaha des conversations et les reflets de la pluie sur la vitre et le trottoir.

でも、私はもうちょっと歩道や窓ガラスに降る雨の反射と会話の喧騒のなかで、このカフェ・テラスで、自分の人生を宙吊り状態のままにしておきたかった。²⁶

語り手はカルメンという女性に彼女の家の一室でさんざん待たされる。あまりにも彼女が出てこないで、彼は散歩に出かける。しかし、雨が降ってきたため、彼女の家の近くのカフェのテラス席に腰掛ける。ここでは、カフェ・テラスは語り手の「宙吊り状態」を引き起こす場になっている。長時間待たされているにもかかわらず、その時間をさらに引き伸ばしたいと感じるほど、この「宙吊り状態」は、語り手にとって自由を感じさせる心地よい状態なのだ。『失われた時のカフェで』でもロランが「中立地帯 zone neutre」という言葉を度々口にするが、この「中立地帯」も同様の気分を与えてくれる場所だと捉えられる。ここで注目すべきは、カフェ・テラスが通りという外部とカフェという内部との境界になっていることだ。記号学者のロトマンは、「空間の境界の越境」が文学における典型的な題材の構成方法であると述べている²⁷。彼によれば、外部と内部とを遮断する境界を越えることの困難、不可能性が越境に事件性という記号を与える。だが、カフェの一部である以上内部に属しているとは言え、カフェ・テラスはそもそもこの境界を曖昧化する場だ。曖昧化された境界上を漂うことで『迷子たちの街』の語り手は、安心感を覚えているのである。もちろん、モディアノの作品ではテラスのみならず、カフェの内部もしばしば描写される。『暗いブティック通り』に登場するフラマン人の集まるカフェのように、カフェの敷居をまたぐことが記憶の部分的な蘇りにつながる場合もある。ここでは、境界の横断が、語り手が自身の記憶と対峙するきっかけになるという事件性をもつ。だが、記憶は必ずしも主人公にとって喜ばしいものではない。むしろ直視したくない思い出も往々

にしてある。カフェが記憶と向き合う空間だとするのであれば、カフェ・テラスは、そのような過去を曖昧化したいという登場人物の欲望にかなった場なのだ。実際、『迷子たちの街』の主人公も、この当時学校や兵舎、陸軍病院などの締め付けから解放された直後で、新たな人生を始めたいと思っている。テラスが過去を曖昧化し、人生のリスタートを切らせてくれる可能性を持つ場として機能していると言えよう。このように、構造上境界を曖昧化する場所だからこそ、カフェ・テラスは過去の様々なしがらみを忘れさせ、登場人物を心地よい「宙吊り状態」に誘い込む空間にもなり得るのである。

社会学者のオルデンバーグは、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」として「サードプレイス」という概念を提唱した²⁸。彼は、自宅とも職場とも異なる「サードプレイス」が、人々の生活には必要だと主張しているが、その中でフランスのカフェも「サードプレイス」になっているとする。カフェは、固定的な人間づきあいとも完全な孤独とも異なった「公と私のユニークな融合」が実現している場である²⁹。オルデンバーグの現実のカフェに対するこのようなイメージは、モディアノの作品に現れるカフェにも適合するところが多い。『失われた時のカフェで』のルキとロランは本名ではなくあだ名であるし、最初の語り手も自らの身分を他の客には公開せず、最後まで匿名のままだ。カフェでは、他者との踏み込み過ぎない関係性が築かれる余地がある。だからこそ、過去のしがらみを断ち切り、新たな人生を始めるといったイメージがカフェに付与されるのだろう。また、『失われた時のカフェで』のルキを筆頭に、モディアノの小説の主人公は、孤独を抱えた人物である場合が多い。そのため、家族や同僚といった強固な他者とのつながりを持っていない。それゆえ、自己の居場所を希求するのである。カフェは、そうした主人公の願いに適した「サードプレイス」としての意義もあると言えよう。

さて、ここまでカフェと記憶のテーマとのかかわりについて述べてきたが、そもそもなぜ記憶の交差点としてカフェが選ばれているのだろうか。それを理解するには、モディアノが繰り返し扱ってきた記憶の物語の性質を考慮に入れる必要がある。前述のように、モディアノは登場人物の記憶を探求していく物語を頻繁に描いているが、その試みは絶対に完遂されることはない。『暗いブティック通り』では、記憶喪失に陥った主人公が、自分は何者なのかを探求していくものの、最後まで結局自分の本名も分からなければ、恋人だったドゥニーズの居場所も判明しない。『小さな宝石』の主人公も母と思われる人物の足跡をたどってみるが、結局この人物が本当に母親なのかどうか結末まではっきりしない。このように、求めても逃れ去ってしまう曖昧性を帯びた記憶を扱うモディアノ作品の性質は、第一章で検討したカフェ自体の持つ曖昧性というイメージと呼応している。つまり、アルコールを飲む場としてのバーや食べ物を食べる場としてのレストランとは異なり、曖昧で多義的な空間であるカフェは、モディアノ文学に特有の記憶の曖昧性というテーマとそのイメージが重なるのだ。特に、カフェ・テラスは道路と店内との境界を曖昧化する場として構造的にも外部と内部を併せ持ったアンビヴァレントな空間と言える。作中でも曖昧でアンビヴァレントな場として機能しているカフェは、モディアノ文学の本質たる曖昧な記

憶という問題にフィットする公共空間だからこそ、記憶の交差点として重要な意義を持つのであろう。

以上のように、モディアノの諸作品において、カフェは記憶と根本的に結びついた空間になっている。カフェは記憶を手繰り寄せる、記憶を刻み付ける空間であると同時に、記憶から消えて行く、記憶を消す空間でもある。記憶との関連においては、このアンビヴァレンスが、モディアノの小説におけるカフェの最も重要な性質なのである。それは、彼が作品全体を通じて執拗に繰り返してきた記憶の持つアンビヴァレンス、曖昧性というテーマと完全に平行になっている。曖昧な記憶がモディアノの小説の本質だとするならば、カフェはその一部をなす極めて重要な場であり、彼の作品の風土に欠くことのできない記憶の交差点なのである。

第三章 モディアノ文学とカフェ②—多義性の諸相

前章で分析したように、カフェは記憶のテーマと深く結びついた空間であり、そのアンビヴァレンスがモディアノの作品風土に不可欠な場となっている。それが、彼の小説におけるカフェのトポスとして最も注目すべき点であろうが、一方でカフェにはそれ以外にも多様なイメージが付与されていることもまた無視できない。本章では、記憶との関連に囚われないカフェの表象について、その多義性をキーワードに論じる。

カフェは、闇や悪のイメージとの関連でしばしば描写される。『パリ環状通り Les boulevards de ceinture』では、語り手が、ナチスのパリ占領期にタイムスリップし、怪しげな事業に手を染めていた父の実像を探っていく。その中で、カフェは、父の仲間、ミュラーユやマルシュレが若い頃に足を運んでいた空間として選ばれている。ミュラーユは、カフェ通いからジャーナリズムの世界へ入り、やがて怪しい闇商売へのめり込んでいく。マルシュレは、10代の頃から、カフェや盛り場に入出入りし、遊んでいる。肝心の父も、語り手が若い時にクレール・ド・リュヌ (Clair de Lune) というカフェに行っていた。このカフェは、ミュージックホールの芸人たちが集まる店だが、父は午前一時ごろに集まる彼らを見るのを好んでいたと語り手は回想している。このように、『パリ環状通り』では、カフェは全て父と彼の仕事の仲間たちの悪あるいは闇というイメージと切り離せない場になっている。

『夜のロンド La ronde de nuit』では、ナチス占領下のパリにおけるレジスタンスと対独協力組織の二重スパイになり、裏切りの心に苦しむ語り手の心境が描かれる。この小説ではゼリーズ (Zelly's) というカフェが、レジスタンスの人物と対独協力組織の人物との会合場所になっている。物語の中盤で、語り手は対独協力組織の中心人物、ル・ケディブとフィリベールとともに、このカフェに潜入する。どちらの仲間でもある語り手は、ここに向かう間も、中に入ってから終始裏切りの心に苛まれる。カフェはここでは、単に闇の空間であるだけでなく、語り手の心の中の闇をさらに深くする効果をも持っていると言

えよう。

カフェのもつ闇のイメージは、『サーカスが通る』にも見受けられる。物語の中盤で、語り手はジゼルの紹介でアンサールという人物と知り合い、彼から一つ依頼を受ける。それは、指定された時間にカフェに行き、ある男にアンサールが外で待っているから来てほしいと伝えるという内容だ。語り手は依頼を引き受け、実行する。しかし、この男はカフェから出た後、アンサールと落ち合い、行方をくらましてしまう。最後まで語り手には、彼らの行先も関係性も分からない。すべては闇に覆われたままなのである。

『廢墟に咲く花』とモディアノ唯一の自伝と言われる『血統書 Un pedigree』には、ラ・ロトンド (La Rotonde) というカフェが登場する。このカフェは、両作品において、コレージュの寄宿舎の思い出と結びつく。『廢墟に咲く花』でも『血統書』でも、コレージュを脱走する場面があることから分かるように、作中でコレージュは否定的な記憶の場として機能している。ラ・ロトンドは、語り手（あるいは作者）自身の思い出したくない闇とも重ね合わされているのだ。また、『血統書』では、ラ・ロトンドとその付近のカフェは、旅役者や赤ら顔のセールスマン、田舎くさい公証人見習い風の陰険そうな人物などと語り手の父が声を潜めながら話していた場として登場する。ここでも、何やら怪しげな雰囲気のある場としてカフェが意識されており、闇のイメージが付与されていると言えるだろう。

『失われた時のカフェで』でも、ル・コンデに集まっている客の多くは、いわゆる「ボエーム」の若い芸術家や作家であり、一晩中酒を飲みつづけている。このように、闇や悪といったカフェの負のイメージは、モディアノの作品の到る所に見られる要素だと言える。

さて、前章で、カフェ・テラスの機能について詳細に述べたが、記憶と直接的に関わらない場面でも、登場人物がテラス席に座って外を眺めるシーンはしばしば見受けられる。『八月の日曜日』では、語り手とシルヴィアがニースの大通りのカフェ・テラスに座り、通りを行き交う人々を眺める。『ひどい春』では、カフェ・ド・ラペ (le café de la Paix) のテラスで、語り手が次のように感じる。

J'éprouvais une drôle de sensation, assis tout seul à la terrasse du café de la Paix où les clients se pressaient autour des tables. Était-ce le soleil de juin, le vacarme de la circulation, les feuillages des arbres dont le vert formait un si frappant contraste avec le noir des façades, et ces voix étrangères que j'entendais aux tables voisines? Il me semblait être moi aussi un touriste égaré dans une ville que je ne connaissais pas.

客たちがテーブルを囲んでごった返すカフェ・ド・ラ・ペのテラスにたった一人で座りながら、私は奇妙な感覚に陥っていた。それは、六月の太陽、道路の喧騒、黒のファサードととても際立った対照をなしている木々の葉の緑色、そして隣のテーブルから聞こえる外国語の声のせいだろうか？私もまた、知らない街で迷っている観光客であるように感じられた。³⁰

通りの景色を眺めると同時に、周りの人々の声を聞くことで、パリにいるはずなのに、語り手は自分が知らない街で迷子になっているように錯覚する。そこから、彼はある「麻痺状態 engourdissement」に陥り、自分が何者でもない、アイデンティティを喪失した人間であるかのように感じる。テラス席はそこに座っているだけで、街を歩いているような気分させる場所であったと第一章で述べたが、ここではその感覚が一步進んでアイデンティティの喪失という感覚をもたらし、語り手を苦しめることになるのである。

通りを眺める行為は、しばしば他者を待っている時間と結びつく。『サーカスが通る』では、ジゼルを待つために、語り手はカフェの内側から通りを眺めており、また『迷子たちの街』では、語り手がカルメンを待つ間テラスに腰掛けていた。『ドラ・ブリュデー』の冒頭部にも、次のような記述がある。

Ce que j'ai pu attendre dans ces cafés... Très tôt le matin quand il faisait nuit. En fin d'après-midi à la tombée de la nuit. Plus tard, à l'heure de la fermeture...

これらのカフェで、僕は何を待っていたんだろう。まだ暗い朝早くに。日が落ちる午後
の終わりに。もっと遅く、閉店の時間に。³¹

これは、語り手の遠い過去の記憶の中で、カフェで誰かを待っていた微かな思い出だけが残っているという描写だ。このように、カフェ（特にカフェ・テラス）は、通りを眺めながら、何もせずにいる場所、あるいは誰かを待つ場所というイメージが付与されている。これは、歴史に見たカフェのイメージと共通している。『ドラ・ブリュデー』や『血統書』などのノンフィクション、自伝には特にモディアノ自身のカフェに関する個人的経験が反映されており、それらはカフェの一般的な歴史と重なる部分も多い³²。しかし、『ひどい春』における、テラスからの眺めがアイデンティティの喪失をもたらす場面などは、モディアノの独自性が発揮された箇所として理解すべきだろう。

カフェの店主が様々な情報を伝える存在として意味を持つ場合もある。前章で言及したように、『暗いブティック通り』で語り手にドウニーズの子どもの頃の情報を教えたのはカフェの店主であった。『サーカスが通る』では、アンサールの失踪後、語り手は、カフェの店主からアンサールは必ず戻ってくると聞かされる（実際には、アンサールはそれ以来パリを去ってしまったが）。『新婚旅行』でも、カフェの店主が、イングリッドの父は検挙されたと彼女に知らせる。このカフェの店主はホテルのオーナーも兼ねており、イングリッドが父に会うためにホテルの鍵を受け取ろうとした際に、その事実を彼女に伝えるのだ。このように、カフェの店主は、他の登場人物に新たな情報を与える存在としての役割をもっているのである。

さて、ここで取り上げた悪や闇、通りを眺める場、店主の重要性といったカフェのイメージは、モディアノの小説に見られるそのほんの一例にすぎない。他にも、単に食事やコーヒーを飲むためにカフェに立ち寄る描写もあれば、他者を待つ際にカフェにあえて

入らない選択をする描写すらあるのだ³³。モディアノは、一つの作品の中で何回もカフェを登場させる。そのため、その都度異なったイメージが付与され、カフェの持つ役割はバラエティーに富んだものになっている。注意すべきは、カフェのイメージが多様であることそれ自体だ。つまり、モディアノ文学において、カフェはそのトポスを一義的に定められない曖昧な空間なのである。カフェの多義性は、歴史におけるカフェの曖昧性、アンビヴァレンスとも親近性を持つ。もちろん、モディアノの作品に登場するカフェが、現実のカフェと全く等しいものだと考えることはできない。バフチンも指摘しているように、「描かれた世界は、[...]この世界の創出者である作者の居る、描き出す実在の世界と、時空間的にけっして同一ではありえない」のである³⁴。しかし、バフチンは「文学が[...]みずからのものとしてきた、時間的關係と空間的關係との本質的な相互連関」をクロノトポス（時空間）と呼び、このクロノトポスは文学作品の筋を決め、そこで生じる出来事に具体的なイメージを与える際、重要な役割を果たすと主張する³⁵。彼は、その一例としてスタンダーやバルザックの小説におけるサロンを挙げているが、それらは現実の世界における歴史的、公的な領域と日常的、私的な領域とが交錯し、「時代の統一された特徴をかたちづくる」結果、実在の時代が全的に浮びあがってくるものだとしている³⁶。バフチンの考え方に従えば、モディアノの作中に現れるカフェも、彼のカフェにおける個人的、日常的経験やカフェに対する歴史認識、さらにカフェ自体の歴史性などに影響されたうえで、ナチス占領下や1960年代を中心にした時代の全体性が再現されていると考えられる。モディアノが頻繁に取り上げるこれらの時代はカフェ文化が比較的下火になっている時期だが、だからこそ、そこに芸術カフェや政治カフェといった明確なイメージではなく、多義的で曖昧なイメージが浮かび上がってくるのかもしれない。

さて、ここまで述べてきたようなモディアノの小説に登場するカフェの多義性は、モディアノの作品の多くが曖昧なまま結論を出さずに終わることと無関係ではない。結論を明示しないモディアノの小説空間は、それらが開かれ、多義的に解釈することを許す場だとも言える。モディアノ文学が多義的解釈を可能にする文学空間だとするならば、多義的容貌を持つカフェという空間がその風土に適することは間違いない。その意味で、カフェは本質的にモディアノ文学になじむ空間なのである。

おわりに

以上のように、モディアノの諸作品に見るカフェの表象は、多義性、曖昧性をその本質としている。特に、彼が繰り返し扱ってきた記憶のテーマは、カフェと本質的に結びついている。それは、偶然にせよ意図的にせよ記憶をとどめる場、記憶を手練り寄せてくれる場であり、逆に記憶を消す場、記憶から消えていく場でもある。このようなアンビヴァレンスは、記憶の重要な側面であり、カフェは記憶の一場面として不可欠な空間なのだ。

しかし、カフェは必ずしも記憶だけと関わっているのではない。記憶と直接的な関係性

を持たない場面でも、モディアノは、カフェに様々なイメージを付与している。それは、現実的なカフェのイメージと合致する場合もあれば、彼のオリジナリティが存分に活かされている場合もある。重要なのは、モディアノが実際のカフェの歴史性や個人的体験などを昇華し、多義性や曖昧性というカフェのイメージを、作中に落とし込んでいることだ。カフェを多様な角度から描くモディアノの方法は、カフェそれ自体が多義性、曖昧性というイメージを与えてきたことを読者に気づかせてくれる。

モディアノの作品は、基本的に明確な結論を示さない。すなわち、それらは多義的な解釈が可能な開かれた作品群なのだ。だとすれば、カフェはその多義性により、モディアノの曖昧でアンビヴァレントな作品風土になじむ場だと言える。カフェは曖昧で多義的な解釈を許す場として、本質的にモディアノ文学と共鳴する空間なのである。

注

1. モディアノのノーベル文学賞の授与の理由に関して、スウェーデン・アカデミーは、次のように述べている。

pour cet art de la mémoire avec lequel il a fait surgir les destins les plus insaisissables et découvrir le monde vécu sous l'Occupation

ナチス占領下での実際の世界を明らかにし、人間の最も捉えどころのない運命を書いた記憶の芸術のために

(ノーベル賞公式サイト <http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/press_fr.pdf>より。)

2. Alan Morris, *PATRICK MODIANO* (Rodopi, Amsterdam-Atlanta, 2000) には、モディアノの前期作品について、記憶を探求するという共通性があること、にもかかわらず探求は完遂されず、「根本的な曖昧さは残る ([...]l'ambiguïté fondamentale demeure.)77-78 頁」との指摘がある。この性質は 2000 年以降の作品にも共通しており、モディアノの作品全体を通じたテーマと言ってよいだろう。また、Martine Guyot-Bender, *mémoire en dérive poétique et politique de l'ambiguïté chez Patrick Modiano de villa triste à Chien de printemps* (lettres modernes minard Paris-Caen 1999) には、モディアノの小説の主人公は推理小説の主人公のようだが、そこには一般的な推理小説に見られるような一貫性がないこと、それは歴史に関しても同様で一貫性のないパロディカルな個人的記述が書かれるだけであること、そしてだからこそすべてが曖昧でアンビヴァレントな様相を呈することが述べられている。このように、記憶の探求が不完全で一貫せず、最後まで曖昧でアンビヴァレントな状態のまま語りが終わってしまうことは、モディアノの諸作品に共通する特徴として挙げられる。
3. W.Scott Haine, *The World of the PARIS CAFÉ* (THE JOHNS HOPKINS UNIVERSITY PRESS 1996) によると、フランス全体のカフェの数は 1789 年に約 100,000 軒だったのが、1914 年には、500,000 軒にまで増加した。また、パリに限って言えば、1789 年には、カフェの数は 3000 軒だったが、1840 年には 4500 軒になり、第二帝政期のオスマン知事の下で 22,000 軒へと急増した。1880 年代には、42,000 軒を数え、パリは世界一カフェの多い都市となった。
4. 鹿島茂『馬車が買いたい!』(白水社 2009 年)によれば、アンシャン・レジームにおいて、パレ・ロワイヤルは警察の出入りが禁止されていたため、パレ・ロワイヤルのカフェは「治外法権の討論場として革命前夜の過激派の溜まり場とな」った (112 頁)。
5. 菊盛英夫『文学カフェ』(中公新書 1980 年)には、「[...] 芸術家、文学者は第三身分と共に頭をもたげながらも、ブルジョワ文化の硬化に背を向けてゆくにつれ、ブルヴァールのカフェからも足を遠ざけ、ブルヴァールのはずれにあったモンマルトルの丘を中心に、新しく自分たちのコロニーを築いていったのである」(111 頁)とあり、ブルジョワ文化への反発が文学者や芸術家をモンマルトルのカフェに足を運ばせる原因になったと捉えられている。
6. 前掲、菊盛英夫『文学カフェ』には、「[...] カフェの機能化は一段と押し進められ、三百年來カフェが持ち続けてきた社会、政治、思想、芸術上の変革醸成の場たる性格は稀薄になってしまった」(225 頁)と記されており、パリにおけるカフェ文化は衰退したとみなされている。
7. Leona Rittner, W.Scott Haine, Jeffrey H.Jackson, *The Thinking Space The café as a Cultural Institution in Paris, Italy and Vienna* (Ashgate Publishing, 2013) のイントロダクションには、カフェは人々が単に飲み物を飲みに行く場所ではなく同様に思考の場所だったと述べられており、会話と思考が入り乱れる空間としてカフェが重要な役割を担ってきたことが強調されている。
8. 和田博文・真鍋正弘・竹松良明・宮内淳子・和田桂子『言語都市パリ 1862 - 1945』(藤原書店 2002 年)には、吉田健一が「カフェ」という文章の中で、フランスのカフェについて、「名目はココヒイを売る店なのであるが、

それよりもこれは実は、何もしないでぶらぶらしてゐる為の場所なのである。そして何もしないでゐるのにも道具がなくてはならないから、コオヒイを出し、その他に安ビールを含めた酒類もあって、簡単な食事も出来るし、頼めば便箋と封筒、それにペンとインクも持って来てくれる。新聞は幾通りか綴じて置いてある」(35頁)と記していると述べられている。

9. 林信蔵「日本の西欧化、カフェの日本化—永井荷風の文学表象を中心に—」(『比較文化研究』(86) 日本比較文化学会 2009年) 31頁。この論考では、永井荷風の『ふらんす物語』に収録されている「再会」の描写から、パリのカフェ・テラスは、座っているだけで街を歩いているような錯覚を起こさせる場であったと分析されている。
10. ブルジョワが集まるカフェもあれば、労働者の集まるカフェもあるという点も、両者の社会的イメージを踏まえると、カフェのアンビヴァレンスを象徴する事例と言える。
11. 人と人の出会いの場としてのカフェについては、松崎之貞『モディアノ中毒 パトリック・モディアノの人と文学』(国書刊行会 2014年)にも、「人と人の出会いや交遊の場としてよく使われている」(211頁)と指摘がある。
12. 例えば、『暗いブティック通り Rue des Boutiques Obscures』で、語り手とドウニーズが出会うのはホテルのバーであり、『青春時代』でオディールとルイが出会うのは、駅の小さなレストランである。しかし、カフェでの出会いに比べるとその例は少ないと言わざるを得ない。
13. Patrick Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue* (Gallimard, Barcelone, 2016) 18頁。
14. 『暗いブティック通り』の主人公は記憶喪失者であり、ユットと別れた後、自らの記憶を取り戻すべく探索を続ける。
15. 『小さな宝石』の語り手の女性は、子どもの頃に母はモロッコで亡くなったと聞かされており、母のことをはっきりと覚えているわけではない。唯一の手掛かりは、持っている写真だけである。
16. Patrick Modiano, *La Petite Bijou* (Gallimard, Barcelone, 2015) 17—18頁。
17. 『迷子たちの街 Quartier perdu』でも、カフェが同様の役割を持つ場面がある。ある時、語り手がカフェに腰掛けていると、男に話しかけられる。その男は、語り手が二十年前に関わっていた人物たちと知り合いであり、彼との出会いが、語り手を過去への探求へと駆り立てる契機となる。
18. 『失われた時のカフェで』は、ル・コンデの常連客、ルキにまつわる記憶が物語の中心をなしているが、その中で語り手が四人入れかわる。最初の語り手は名前の明かされない鉱業学校の生徒、二番目は探偵のケスレー、三番目がルキ本人、そして最後の語り手がルキの恋人のロランという構成になっている。
19. Patrick Modiano, *supra* note 13 146頁。
20. Patrick Modiano, *Voyage de noces* (Gallimard, Barcelone, 2015) 158頁。
21. Patrick Modiano, *Villa Triste* (Gallimard, Barcelone, 2016) には冒頭と、結末部で二回、同じカフェの名前が思い出せないという文章が登場する。13頁に、*S'appelait-il café des Cadrans ou de l'Avenir?* (あのカフェはカフェ・デ・カドランだっけ、ラヴニールだったっけ?) と書かれ、ほとんど同じ一文が202頁に繰り返されている。
22. カフェが消失するという描写は『迷子たちの街』にも登場する。この作品では、イギリスで小説家として活動するフランス人の語り手が約二十年ぶりにパリに帰ってくるが、以前あったカフェがなくなっていることに気付く。
23. Patrick Modiano, *Une jeunesse* (Gallimard, Barcelone, 2015) 11—12頁。
24. Patrick Modiano, *supra* note 13 83頁。
25. Patrick Modiano, *Dora Bruder* (Gallimard, Barcelone, 2015) 118頁。
26. Patrick Modiano, *Quartier perdu* (Gallimard, Barcelone, 2015) 111頁
27. ユーリー・ロトマン「文化のタイポロジー的記述のメタ言語について」(『文学と文化記号論』磯谷孝編訳 岩

波現代選書 1979年) 311頁。

28. レイ・オルデンバーグ『サードプレイス』忠平美幸訳 (みすず書房 2015年) 59頁。

29. 同 250頁。

30. Patrick Modiano, *Chien de Printemps* (Édition du Seuil, Paris, 1993) 96頁。

31. Patrick Modiano, *supra* note 25 9頁。

32. 例えば、『血統書』には、「執筆を行う場所」としてのカフェのイメージが表れている。ここでは、最初の小説(つまり処女作『エトワール広場 La place de l'étoile』)を書き始めたのは、20歳の終わりごろの夏に行った南仏のカフェ・レストランのテラスであり、その後パリに戻っても、部屋やカフェで小説の執筆を続けたと記されている。サルトルやボーヴォワール同様、モディアノもまたカフェで作品を書いており、その事実を作中に表現していると言える。

33. 『サーカスが通る』では、中盤で語り手とジゼルがカフェで待ち合わせをする場面があるが、語り手は彼女を待つのに、あえてカフェで座って待つのではなく、近くの通りを歩いて時間をつぶすことを選ぶ。

34. ミハイル・バフチン「小説における時間と時空間の諸形式」(『ミハイル・バフチン全著作第五巻』伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也訳 水声社 2001年) 407頁。

35. 同 143頁。

36. 同 393頁。

参考文献

オルデンバーグ, レイ『サードプレイス』忠平美幸訳 (みすず書房 2015年)

鹿島茂『馬車が買いたい!』(白水社 2009年)

菊盛英夫『文学カフェ』(中公新書 1980年)

中村啓佑「日仏文化比較試論(2) —カフェと喫茶店—」(『追手門学院大学文学部紀要』(35) 追手門学院大学文学部 1999年 pp105 ~ 122)

ノーベル賞公式サイト <http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2014/press_fr.pdf>

バフチン, ミハイル「小説における時間と時空間の諸形式」(『ミハイル・バフチン全著作第五巻』伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也訳 水声社 2001年)

林信蔵「日本の西歐化、カフェの日本化—永井荷風の文学表象を中心にして—」(『比較文化研究』(86) 日本比較文化学会 2009年 pp29 ~ 39)

松崎之貞『モディアノ中毒 パトリック・モディアノの人と文学』(国書刊行会 2014年)

ロトマン, ユーリー『文学と文化記号論』磯谷孝編訳 (岩波現代選書 1979年)

和田博文・真鍋正弘・竹松良明・宮内淳子・和田桂子『言語都市パリ 1862—1945』(藤原書店 2002年)

Guyot-Bender, Martine, *mémoire en dérive poétique et politique de l'ambuité chez Patrick Modiano de villa triste à Chien de printemps*, lettres modernes minard, Paris-Caen, 1999

Haine, W.Scott, *The World of the PARIS CAFÉ*, THE JOHNS HOPKINS UNIVERSITY PRESS, 1996

Lepage, Auguste, *Les Cafés artistiques et littéraires de Paris*, Martin-Boursin, Paris, 1882

<<https://archive.org/details/lescafesartist00lepa>>

Modiano, Patrick, *Chien de Printemps*, Édition du Seuil, Paris, 1993

———, *Dans le café de la jeunesse perdue*, Gallimard, Barcelone, 2016

———, *Dimanches d'août*, Gallimard, Barcelone, 2014

- , *Dora Bruder*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *Fleurs de ruine*, Éditions du Seuil, France(n.p.), 1995
- , *La Petite Bijou*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *La place de l'étoile*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *La ronde de nuit*, Gallimard, Barcelone, 2014
- , *Les boulevards de ceinture*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *Quartier perdu*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *Rue des Boutiques Obscures*, Gallimard, Barcelone, 2016
- , *Un cirque passe*, Gallimard, Barcelone, 2014
- , *Un pedigree*, Gallimard, Barcelone, 2016
- , *Une jeunesse*, Gallimard, Barcelone, 2015
- , *Villa Triste*, Gallimard, Barcelone, 2016
- , *Voyage de noces*, Gallimard, Barcelone, 2015
- Morris, Alan, *PATRICK MODIANO*, Rodopi, Amsterdam-Atlanta, 2000
- Rittner, Leona, & Haine, W.Scott, & Jackson, Jeffrey H., *The Thinking Space The café as a Cultural Institution in Paris, Italy and Vienna*, Ashgate Publishing, 2013

La représentation du café dans les œuvres de Patrick Modiano

Eiji Yamauchi

Patrick Modiano écrit depuis un demi-siècle. Ses œuvres caractérisées par l'ambiguïté, se réfèrent au thème de « l'art de la mémoire ». Il y a un endroit important chez Modiano, c'est le café. Le café apparaît dans presque toutes ses œuvres. C'est parce que le café a des relations étroites avec l'élément important de ses romans.

En France, surtout à Paris, le café se généralise au XVIII^e siècle, et son nombre augmente jusqu'au début du XX^e siècle. Il était toujours un espace où l'on discutait de nombreux sujets. Mais, il n'était pas que ça. Il était aussi un espace où les ouvriers buvaient, les prostituées attendaient des clients et où on pouvait s'asseoir toute la journée sans rien faire. Ainsi, le café a de nombreuses fonctions.

Chez Modiano, le café est aussi un endroit où les personnages se rencontrent et conversent. Il est également un lieu qui sépare deux personnages. Le café est un endroit ambivalent. L'ambivalence ne se limite pas à la rencontre et à la séparation. Elle entretient une relation étroite avec la mémoire. Par exemple, dans *Dans le café de la jeunesse perdue*, il y a une scène qui se passe dans un café qui s'appelle Le Condé et pendant laquelle un personnage essaie de noter tous les noms des clients du café pour en garder la mémoire. Ici, le café fonctionne comme un espace qui permet de garder et retrouver la mémoire. Un phénomène similaire apparaît dans d'autres œuvres de Modiano. Cependant, le café fonctionne aussi comme un endroit qui efface la mémoire, parfois le café lui-même disparaît ou s'évanouit de la mémoire. Par exemple, dans *Voyage de nocces*, un café disparaît à la fin. Cette disparition crée un sentiment de vide chez le narrateur parce qu'il éprouve la douleur d'une perte. Au contraire, dans *Une jeunesse*, le café crée chez un personnage l'illusion de recommencer sa vie à zéro. Ici, la libération du passé due à la perte de mémoire est décrite comme positive par l'auteur. En somme, le café chez Modiano a un caractère ambivalent, car il est étroitement lié à la mémoire.

Pourtant, il y a d'autres images du café dans les romans de Modiano. Par exemple, c'est un espace qui évoque le vice, où on s'assied à la terrasse sans rien faire, et dans lequel les patrons donnent plusieurs informations à d'autres personnages. Ainsi, bien que le café ait un caractère ambivalent et soit lié avec la mémoire, sa fonction est équivoque. En d'autres termes, le café chez Modiano est complexe, à la manière de ce qu'il est dans la réalité. Il s'agit d'un lieu fondamentalement ambigu. Ainsi, on peut dire qu'il est indispensable aux œuvres de Modiano, dont l'élément le plus important est l'ambiguïté.